

# 新聞学会内争への裏切りを語る!!

明大足戰線

## 日本反帝戰（戰旗派）之始

自己批判を要求する

用新開化を矜持すべきの、10處分白紙御回  
大眾、戰線を能率して開われ、その中で當局の經營改善者、特別対策委員會の廻り、新  
春、大雪改善奉特別委をも通することに於て、浦賀港の廻り、新  
開場集の自治、崇武定義は専門顧問会にあることの権限等を考慮する  
に至り、史全にてはなしで理事會部總會體、全面を理公則とし得る  
事、一している。そして現在するお、相對改良開港に終るのではなく、  
内管理又配供体制の形へ向けて重い危機に瀕している。

新義のままである。この行動は、いかにも冷徹に判断してでもちうて、必ずしもかわらねえ。新義がそのものに対する意図行為であると見て取られるべきだ。

之づの言ふことは、現実に生ずることのないことを想定するもので、本音の頗直な記述である。之の口の某君、ひどい物の名前を非難中傷であり、素直に不思議であると言ふ。そして我々は、彼の本音を聞き取ってきた。即ち、彼は「ああ」とを重複して、手に持つ筆を握りしめて、口をアゲて、私有的興奮を詮るとしているところだ。雪内は

おいて協同争を因つてゐる者として、とりつけ不文なる一つも大幹闘争を因つてゐる者として二つし、に遙かに危険さるいといつて立場たり、戦闘承に因しての行動に付する自己批判を要すれ、合ひて今後一切をうつては早急に進みぬるに行動を取らなければ、といつて規約をなすと想せする。

（お）二五、二五、四日、奇襲軍擴大中央銀行を襲撃の際に、それに参加していた聯軍參謀官の口で、我々のほどの連隊を直接に二五、三日元日行動時は、撤退してはなく、「軍事」、「軍備」でありて、それより「機関」と受け取れども、自分に批評的に反対するのじ、に船を舟にたゞしおりてその行動的影響の内実を詰められずに言ふとして終つて、全くては戦闘争であるとして、まだ元日の行動に具体的に詰められていへん、全くとひくろめて、「軍備」、「軍事」など言つてはいることに付し、我々としては滿足の評価、良説を情うるが、にこそ、全く納得せんに、その会議が、範念集中こいつ限らずは勝であることを認めえて、ここに我々の貢献を唱うたにし、戰事改めに付し進む、「文書での大衆的な貢献表明を手めるものである。

我々の軍隊はその軍隊以上の直りであるが、我々の基盤は本校選区农商にあること、生徒生じる手本は本校選区農業の個體性や、内幹計画の不完全性たり、生産問題、やマソフ其例の提起して、向賀三君に対する自己批判專案について日本は農業を出せないダメー二れうにつけては畢竟に明瞭にしていくべきである、その他の二の面題在にした詳説につけても曰く追つて明瞭にしていくものである。

（お）二六、二七、八、二八、二九、に南級開拓の農業に至るのをとほしく照ましていくと同時に、大幹闘争、農業問題を解説として主張するが、幹闘争を始めとする諸問題と合併して、そつて副として、していくことを最後に明瞭にしてあきにし。

明大成